【2011.4 月　No.4】

(社)徳島県労働者福祉協議会

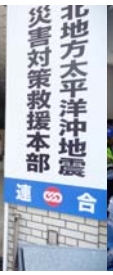
中央LSCニュース

発行　徳島中央ライフサポートセンター
〒770-0942　徳島市昭和町３丁目 35-1
TEL・FAX　　088-623-4105
E-mail chuou-lifeh@utopia.ocn.ne.jp
http://www1.ocn.ne.jp/~chuou-lf/

東日本大震災・連合救援ボランティアレポート

報告者　徳島中央 LSC 所長　原崎健児

3 月 11 日、宮城県沖で国内観測史上最大のマグニチュード 9.0 の巨大地震が発生し、東北沿岸部は津波で壊滅的な被害を受け、死者・行方不明者の総数は 28,000 人を超え、5 万 5000 戸以上の家屋が全半壊し、10 万人以上が厳しい避難生活を送っている。また、津波で冷却機能を失った福島第一原発は水素爆発や高濃度汚染水が流出するなど、いまだ放射能被害の収束の見通しが立っていない。この緊急事態に対応し、日本国内はもとより世界各国から救援・支援の手が差しのべられた。連合もいち早く、被災した方々の緊急支援として避難所などでの支援活動を構成組織及び地方連合会との協力連携により実施し、「連合救援ボランティア」を当面 6 ヶ月間、避難所、民家などの救援活動を中心に集中派遣した。まさに連合が目標とする地域（被災地）に根ざした顔の見える運動を展開することになった。私自身も 4 月 8 日から 15 日の間、岩手県宮古市に派遣された。宮古市では、396 人が死亡し、1,301 人が行方不明になっている。田老地区では一部の箇所で津波の高さ 37.9mを記録し、海外でも知られる名所となっていた総延長 2,433m、高さ 10mの「田老万里の長城」と呼ばれる大防潮堤を乗り越え町を一気に押し流した。4 月 8 日、総評会館（東京都）をバスで出発する予定であった岩手派遣 92 名（うち宮古派遣 44 名）は、その前夜、宮城県で発生した震度６強の地震の影響で、派遣先の停電や高速道路の通行止めにより、出発が２日延期され、4 月 10 日、10 時 30 分、満開の桜に見送られての出発となった。東北自動車道は地震の影響によるものなのか、ところどころにできた路面のうねりを通過する度にお尻が突き上げられるようなショックを受けた。活動拠点（宿泊場所）となる宮古市新里高齢者コミュニティーセンターには出発から約 10 時間かかって到



着した。ボランティア活動は、8:30 に出発して、一旦、宮古市社会福祉協議会が運営する宮古市災害ボランティアセンターに向かう。基礎的な班体制は四国グループ（高知、愛媛、徳島）の 3 人となっているが、当日の作業班は出発前に編成される。基礎班だけの場合もあり、別の班が加わっての複数班体制の時もある。ボランティアセンターではさらにその上に一般ボランティアを追加することもあり、作業班の面々は基礎班以外は毎日変わる。活動に必要な道具や資材の貸与はボランティアセンターの現地事前調査により決定されており、指示に従い連合車（ワンボックス）や送迎用の小型バスに積み込まれ、そこから現地に向かう（帰りはその逆のコースを辿る）。作業活動は 10:00～15:00 までとなっており、16:00 過ぎには宿舎に帰ることができた。

◆ボランティア活動　第１日目（4 月 11 日（月））

津軽石地区における民家の不用品の運び出しを 3 人で行った。畳は水を含むと、とてつもなく重くなり、大の男が 3 人がかりとなる。衣類も水を吸って重い。冷蔵庫、洗濯機、水屋、箪笥、どれもこれも重いものばかりである。この家では 1 階が浸水し全ての家財道具が駄目になっていた。搬出に立ち会っていた家主にとっては、思い出の品や大事な道具であり、辛い作業であったと思う。

【写真左】は、運び出しを終えて、隣家の庭先に積み上げたところで、被災者の家は 30m位奥に入り込んでいる。写真には写っていないが、右側に不要になった電化製品も並んでいる。

◆第２日目（4 月 12 日（火））

津軽石地区における民家の不用品の運び出し及び泥出しを行った。この日は一般ボランティアの高校生らも加わって 10 数名で行った。庭の泥出しが主な作業であったが、広かったため時間がかか

った。泥は津波が運んできた砂、ヘ泥などが混じっており、黒い粘土状のものが 10cm くらい堆積した状態になっている。それを元の地肌が見えるまで削り取る。2 人が組になって、1 人がスコップを使い、もう一人が土嚢袋の口を開けながら手際よく泥を詰めていく。袋に 7 分目で 20ｋｇ位になる。それを 1 日で 500 袋位庭先まで運び出した。天候がよく、日差しが強かったため、汗が額からこぼれ落ちた。日頃肉体労働をしていない身には相当疲れる。

◆第３日目（4 月 13 日（水））

大通地区における雑居ビル１F の床掃除と泥出しを 25 人で行った。1 F には 5 軒のスナックが営業していたが、大家さんが言うには天井近くまで浸かったそうである。私の担当したところは、酒瓶、応接セット、椅子などは店主が先に片付けたのか見当たらなかったが、コップ類や雑貨類が泥にまみれて散乱していた。カウンター内の上部に取り付けられたテレビも置き去りにされていた。入り口の扉は鉄製で頑丈な作りであったが、ノブのすぐ上部に１０cm くらいの穴が開けられおり、警察が捜査する時の立ち入り禁止の黄色いテープが残っていたので、犯罪に会ったと思われる。さして重いものもなく、コンクリートの床であったため、泥出しもスムーズに運び、この日は比較的作業が楽であった。

◆第４日目（4 月１４日（木））

津軽石地区における民家の庭及び家の周りの泥出しを 10 人で行った。この日も 1 日で 500 袋位庭先まで運び出した。築 3 年の新しい家で、家の中は津波に浸かったとは思えないくらい掃除、片づけができていた。泥出しは単純作業で飽きてくる。体力と忍耐が必要である。

◆第５日目（4 月１５日（金））

赤前地区における民家の家の周りの片づけを 15 人で行った。この家は海岸から近いため、漁具や瓦礫が相当流れてきたようである。その上に民家自身が所有していた材木、道具なども散乱しており、敷地が広いため片付けは大変であった。軒先にあった材木、瓦礫などは重機が使用できる場所

まで移動した。最終的には市のゴミ収集を待たなければならず、一箇所に集めることにした。運搬中心の作業だったので比較的楽であった。

◆作業を終えて

体力が持つかどうか心配だったが、出発直前の地震による足止めのため、作業期間が 2 日短くなった。今思えば、5 日でも結構きついのだから、7 日間だったら大変だったと思う。幸い天候に恵まれ、暖かい日が続いたので「東北の寒さ」を体験することはなかった。また、近くの温泉施設で入浴できたので、体の疲れが和らぎ、疲労困憊にはならなかった。ボランティア先の家族や老夫婦が帰り際に泣いて見送ってくれたことも働くエネルギーとなった。宮古に到着した時は、宿泊所の付近は全く被災しておらず、何事もなかったかのようであった。しかし、次の朝、ボランティア先へ向かう時には 10 数台の自衛隊車両と行き違い、海岸地帯に近づくほど警察官やパトカーが目に付くようになり、物々しい雰囲気となった。また、景色も一変した。主要道路こそきれいに片付けられていたが、空き地には津波で流されたいくつもの家の土台が見えるし、至る所に瓦礫の山がある。家の柱や部材などが津波の力で粉砕され原形が分からなくなったものが積み上げられている。ぐしゃぐしゃに潰れた車や陸に打ち上げられ転覆した船も点在していた。新聞や報道写真では見ていたが、目の当たりにすると余りの凄さに現実でないような気がする。私たちがボランティアで出向いた先は、掃除や修理が終われば生活ができる見通しが立っているが、全てをなくして避難所生活をしている人はどんな気持ちで日々を送っているのだろうか。宮古は今、梅の花が咲いており、桜の花もほころび始めたが、辛く厳しい春を迎えることになった。早く、安らぎと平和な春が訪れることを心から祈りたい。「頑張れ宮古 ！ 立ち上がれ東北 !」

このたびの「東北関東大地震」におきまして、被災された皆様、また、被災地域にお住まいのご家族・ご友人がいらっしゃる皆様には、心よりお見舞いを申し上げます。また一日も早い復旧を心からお祈り申し上げます。徳島中央ライフサポートセンターにおいても、労働団体、労働福祉事業団体と連携し、被災者に対する支援に取り組みます。